

# 「最善の音韻論的解釈は一つしかない」 といふ作業仮説に対して

亀 井 孝

本論とみるべき部分にさきだつて、いま、筆を下さうとしてゐるところの、つまり、まへおきとみられる部分——もし名づけるならば《誤解について》とも名づくべき——が、本論に比して、ふつりあひに長いとせらるゝ向きもあるかも知れないが、さうおもはれるかもしれぬ方々に対しては、まづ、あらかじめ、その点について、諒承を乞うておきたい。ただし、この導入部は、単に本稿——それは、一往、続編とは独立したものとして執筆するが——の主部にのみ対するものではなく、後述のごとく、大方の要請にもとづいて、いづれは、どうも、さらに筆をとらねばなるまいかと覚悟をしてゐるところの、本稿の続編にもかゝはるものとして、そのつもりで筆を起してゐるわけなのである。

さて、服部四郎教授は、入門講座として連載中の「音韻論」の(二)を本誌第二十六輯に寄せた。この内容といふのが、じつは、「亀井さんの批評」の批評の形をとつてゐる(こゝにカギの括弧をもつてくるところは、服部教授のことばの引用。以下、おなじ)。わたしとしては、決して正面切つて服部教授への批評をものしたつもりではなかつたが、教授としてそのやうにうけとつたであらうやうに、ほかのひとびとにも、また、おなじくうけとられるであらうところの、そのやうな印象を生むところのものが、わたしの文章そのものうちに根ざしてゐるならば、それは、わたしが、わたし自身の表現のつたなさによつて、十分に自分の本意に添ふところとならぬ書きかたをしてしまった結果である。しかし、この、わたしの不敏は、ときに、痛烈な、また、激越な表現をいとはない教授の望外に温かな理解にむかへられ、拙文の内容に対する誤解をもさしてひきおこさずにすんでゐる。しかしながら、上にいったやうに、教授の文章が、亀井がものしたところの、その内容に対する批判の形をとつてゐることは、いひかへれば、拙文をば教授への批判とうけとることによつ

て、拙文に対する反駁として書かれてゐることは、明かといへよう。他方、拙文を、すでにひとり歩きをしてゐる存在として、客観的にこれをながめたばあひ、それが、その形式において——、たとへ、わたしが自己の主観についてなんと弁明しようとも——、教授への批評とみなされざるをえない外見を呈してゐるかもしれないことは、しかし、拙文が、その内容において、教授のいふところを教授の趣旨に即して理解しようとするつとめてゐる、そのわたしの努力を否定するものとはなるまい。とにかく、あれは、問題が——すくなくとも、あの当時——、教授のもつとも関心をよせた、もつとも得意なものであつたはずゆゑ、その油の乗つたところをあへて批評のために対象にとりあげようといったやうな大それた気持は、わたしには、なかつたのである。そのうへ、その拙文の内容について、さらに、教授のがはにも、また、誤解が起つてゐるのではなからうかと——、これについては、続稿の方でふれるつもりであるが——、こんどは、わたしがはから感ぜられるところもある。しかも、それが、もし、こと学問に關しては、なにごとをも、いささかも疎かにしない真摯な教授が、拙文を教授への一途なる批評としてうけとめてしまつたところに出づると解しうるものであるならば、かりに、誤解をうけた箇所はすくなくとも、その多寡は、こゝに、たゞちに問ふところでない。また、そのやうな箇所における誤解の度合は、たとへかるとしても、その度合も、こゝに、たゞちに問ふところではない。たゞ、いはゞ誤解の根は、たとへ、それが細いものではあつても、その根そのものをたぐつてゆくと、深い地盤に達するものやうに思はれるのである。このことは、なにも、誤解を招いたであらう責任がわたしがはにはないとの謂ではない。しかしながら、拙文の執筆を動機づけたものは、第三者——当面のばあひには、亀井にはかならないが——からしては、いまだ十分に定義されてゐないとうけとれた教授独自の特異な術語に対する質疑に発した愚翰（国語研究第三号服部所引）と、それがはらんださゝやかな服部解釈——すくなくとも、わたしの意図においては、超越的でなく、内在的な——とである（同上所載拙稿参照）。もとより、動機づけと、動機によつて導かれる結果とは、論理的には分くべきであるが、おしなべて、結果といふものに対しては、やはり、筆者（単に一人称われの意でなく、一般的に書く人の意で）なる人間に責任の負ふべきものがある。と考ふべきかぎり、わたしにおいて、あのばあひ、動機を展開した理念は、批評それ自体を目的とするところの理念ではなく、わたしは、かうではないかとおもふが、さう考へてはいけなからうかといふ、解釈のしかたの可能性の理念であつた。すなはち、解釈といふものに相対主義を持つてゐるわたしにとっては、——けだし、有限の能力しかもたない人間の解釈は、絶対ではありえないし、ある意味では、解釈するといふこと自体が、無限の可能性を有限の形において定

着することであるから——、解釈のしかたにいろいろありうるといふことは、しかたそのものに関して、解釈の、いはば、みちが一つでないといふことであり、それは、その意味で、解釈の多途といふこと、何々性といふいひまはしを借りれば、解釈の多途性の問題である。たゞし、すべてのみちは、ローマに通ずるといふ。多途とあへていふのは、それが多岐と同義ではないことをいひたためである。だから、わたしの試みたのは、ひとまづ、解釈の多途とその実験であつた。しかしながら、こゝにおもしろいことは、二つの途が、いはゞ、それぞれの途を別途に歩む二人の人間と人間との交渉といふ面において、つまり、そのやうな交渉の形で、ふれあはざるものでありながらふれあふと、そこから生ずるくひちがひが、相互の誤解といふものになつてくることである。そして、——この点は、単におもしろいばかりでなく、言語学にとつて十分に注目すべきであるが——、このやうな形で、人間——といふ因子——の捨象されないとこの・言語への視野、すなはち、そのやうな言語の問題は、——いはゆる国語学界における時枝理論のごときを別にするなら——現代《言語学》として確立されてゐるところのその言語学そのものではとりあつかふことをしない視野であり問題である。このことは、まさに、《言語学の術語の意味論》が、もはや、われわれの好むと好まざるとにかゝはらず、——つまり、かかる意味論の理論そのものは、いはゆる言語学者たちの言語学の次元を超えてはゐても——さげがたく必要であることを、おのづから語つてゐるものである。今般の、教授に対するわたしの学問的交渉——あるひとが、《すさま論争》とあだ名でよんだ（このばあひ、論争といはれる点は、すこし迷惑だが）——も、術語の意味論に端を発し、結局、問題は、また、そこに還元されるのである。

服部教授の論文（または、諸論文）ならびに教授によつてとりあげられた拙文の読者のうちには、すぐれた眼識のひとつも少からぬことと思はれるが、それらの人びとも、また、人間、結局は、有限の能力しかもたない人間の、その宿命を負つてゐる点では、平等である。何人かの方がたから、教授の書くところとわたしのとをよみくらべて、かれをよめばかれ、これをよめばこれと、結局、どちらがいかかわらないといふことの率直な告白が、じつは、わたしに対してなされてゐる。このやうな事態は、服部教授においては、むしろ、はなはだ本意とされるところでもあらう。たゞし、わたしのたちばにとつては、それが教授にとつて不本意であらうやうには、あるいは、あらうほどには、不本意でない。たとへていへば、こゝに一流の画家の一流の作品と二流の画家の二流の作品とがあるとする。このばあひ、二流の作品も、作品は作品である。すくなくとも、そのやうなふくみでは、わたしの所論も、それなりに、そのやうなものではあるから。

とはいふものの、教授の所論に対して亀井の意見を、もしあらば、さらに述べてほしいとの希望も、また、きかされてゐるのは、これまたやはり、ゆゑなしとはしないこととおもはれる。芸術のばあひには、二流の作品も、完結したものとして、その自己を主張するが、学問のばあひには、いかなる労作も懐疑の祭壇の犠牲に供へられてゐるといひえようから。たゞ、わたしのねがふところは、みづからは批判のごときをさしひかへたひかへ目な第三者をよそに、わたし自身の力量が、つまり、その不足が、誤解から誤解を生むといった、いっそうあしき事態をもたらさざらんことである。このねがひは、しかしながら、「生ずるかも知れない」と予想される誤解からも、「全く予期しない」誤解からも、善意ある人間を、善意があるだけでは、救ふことができない。すなはち、ある程度までは、ひとの善意とそれにもとづく努力——本人は、それを、いかにはらったつもりであらうとも——とのあなたへ逸脱した形において、誤解がさがりたいといふ恒常のことに対しては、所詮、いま述べたやうなねがひは、無力である。それゆゑ、わたしは、自分の書くであらうとすることが相応の意味を、学問に対して、——少くとも、現実において、日本の学界に対して、——現在、もつかいなままでを相当に計測しえないうちに、わたくしの考へをおほやけにすることは、さしひかへてきた。いな、むしろ、さまでのわざは、無力のわたしとして、もくろんでこなかつたといった方が、わたしの主観的なきもちに即してゐる。

しかしながら、いま、わたしにとつては、《誤解》は、理論的な対象であるよりさきに、行動に伴ふ現実の問題なのである。したがつて、誤解そのものがさがりたいものであるとすれば、ひとの「全く予期しなかつた誤解」をしたり、「生ずるかも知れない」と予想される誤解をひとにさせる余地を作つたりは、精々、しないやうに心がくべきである。そして、かりに、そのやうな努力をしたとして、そのうえで、さらに避けえぬところの誤解、それを相殺し償却して積極的に寄与するところあるものをおほやけにするといふことは、または、しうるならしたいといふことは、だから、理論の問題でなく、責任の問題である。そのやうな責任の自覚において、わたしは、服部教授の「音韻論」に対する多少の私見——たとへば、ヤーコブソン流の《dichotomy》(二分法)の意義は、部分的にしか認められないのではないかと疑問——を、本稿の続きの形で、いづれ書かうと——ためらひながらも——覚悟してゐることは、冒頭にふれておいたところであるが、本稿は、ひとまづ、それへの序説として、わたしのいはゆる解釈の多途性が、一面では、最善の音韻論的解釈は一つしかないといふ教授の仮説と矛盾しないけれども、しかし、他面では、この根本原則が属すべき世界の次元と、わたしの解釈の多途性の可能性が容認されうる次元とが異なることを明らかにしてみたい。この二つの関係を、あらかじめ譬喩にかりて述べ

ておくならば、さきに引いたことわざ「すべてのみちはローマへ通ずる」の、そのみちとは、われわれにあっては解釈の途であり、ローマとは、「最善の音韻論的解釈」のこととなる。かくて、つぎに、かの作業仮説として服部教授が提示したところのものの意味とそこにふくまるべき意義——または無意義——とを、ひとつ、わたくしなりに、考へてみたい。

## 二

服部教授が「最善の音韻論的解釈は一つしかない」といふ作業仮説を提示したのは、かうである。教授は、ヤーコブソン教授がかれの方法的手順によつて、趙元任教授の、かの有名な《音韻(論)的解決の非単一性——non-uniqueness of phonemic solutions》を克服できると考へたのに対し、その克服を結局は不可能なではなからうかと疑ひ、そこで、服部教授の意見では、

「音韻論的解釈は単一ではあり得ない」という作業仮説よりも、「最善の音韻論的解釈は一つしかない」という作業仮説の方が、実践的に有利であると思う。(p. 56)

と述べるのである。ここには、当然、ヤーコブソン教授に対する異存と趙元任教授に対する修正とがふくまれてゐる。しかしながら、ヤーコブソン教授と趙元任教授との説を敷衍して述べることはもとより、それらとの対比のもとに服部教授の説を三者相互の聯関として捉へることも、こゝでは、かならずしも必要ではない。いやしくも、それが作業仮説である以上、かの命題「最善の音韻論的解釈は一つしかない」は、あらゆる個別的な事例のうへにそれを超えて君臨するところの・哲学のことばでいへば、実質を捨象された形式としての意味のみをもつ・原理たるべきものであり、そのやうなものととして、それは、他に侵犯されざる尊厳を具へた絶対のものであるとみなされる。このやうな、理論的超越性とよびうべき性格に即していへば、かの《服部命題》は、命題自体のうちに自己撞着をはらむがごときものでないかぎり、学的操作のはたらきかけをまつところのもろもろの経験的所与を処理する最後のよりどころとなる根本原理として、他の方法体系およびその諸原理と排他的に対立すべきものである。たゞ、そのやうな原理の意義はといへば、それは、作業仮説としての適切性いかんによつて評価さるべきであらう。しかし、それが経験的所与との照応においてたゞしいかどうかを問うてみても、それは、結局、適切性の問題とはかゝはりのないことであると考へられる。

以上は、作業仮説といふものゝ形式的意義であるが、ある命題の形に集約された作業仮説がそのやうなものとして価値

を發揮するのは、經驗的所与の処理といふ実践の面においてである。そこから、いかなる作業仮説が「実践的に有利」といふ問題がでてくることとなる。しかし、こゝに注目されるべきは、上に引いた服部教授のことは煩をいとはずくりかへすならば、それは、「音韻論的解釈は単一ではあり得ない」といふ作業仮説よりも「最善の音韻論的解釈は一つしかない」といふ作業仮説の方が実践的に有利であるとのみはいはず、有利であると思ふと——一往、主観的に——述べてあることである。いかなる作業仮説がそれに対立するところの他を凌いで有利であるべきか、つまり根本的にいへば、適切なべきかは、これらの作業仮説を超えた世界の秩序にてらしてはじめて批判しうべきことがらだからである。

わたしは、《服部命題》をそのやうな超越的な世界から批判しようといふ野心はない。たゞ、いかなる作業仮説が実践的にいっそう有利であるべきかといふ問ひを別の形に轉移することはできる。すなはち、ある作業仮説が適切なものであるためには、それが、それ自体において、それ自体のためにぞましきものとして評価しうるものでなければならぬとみて、そのやうなのぞましき問題に《実践的に有利》の問題を交換することはできるであらう。作業仮説の適切性を評価して判定する規準は、かくて、それを下からさへる方法論的なぞましきさに求めうる。

さて、まづ、《解釈》とは、一定の方法を技術として用ゐるところの理解のことであると考へる。勿論、方法が内部的矛盾を蔵してゐては、もはや、それは方法ではありえない。また、一つの完結した解釈に到達するためには、解釈の技術を前後に撞着の起らぬやうに一貫しておしむべきであることも、これまた、当然の要請である。このやうなことに關しては、こゝにくだくしい展開をさせる。しかしながら、要するに、解釈とは、まづ、技術である。しかし、かの命題において「音韻論的解釈」といふばあいの《解釈》とは、技術としての解釈を適用したその結果または帰結を客観的にとらへて、そこまでをふくめて、さうよんだものであらう。すなはち、解釈は、《技術としての解釈》と《技術としての解釈を適用した結果としての、解釈されたものとしての解釈》とに分れる。これは、《解釈》の概念が、このやうに二つに分れ、かつ、それにとゞまるといふことを意味するものではない。心理学的には、《意識としての解釈》も考へられるであらう。しかし、当面の問題に關しては、以上の二面を分けて考へるだけで、おそらく、こと足りるであらう。

つぎに「最善の」といふことばは、「音韻論的」解釈を修飾するものであること、これは、いふまでもない。したがって、こゝにいふ《善》とは、道徳に關することはではなく、技術に關することはであること、この点も、また、いふまでもない。たゞし、注意しなければならないことは、かの命題が問題にしてゐるところは、《たゞしい解釈》ではなく、

《よい解釈》にあることである。ところで、こゝに問題となるところが《よい解釈》であるかぎり、暗黙のうちに《ヨリよき解釈》の考へられてゐることも、また、明かである。さればこそ、《ヨリよき解釈》の極限として《最もよき解釈》が追求せられるわけである。すなはち、その背景には《解釈の多途》の可能性の肯定が、じつは、前提となつてゐると解しうる。そのかぎりでは、解釈の多途性を肯定すること、その多途からヨリよき途をえらばうとする意志とは、十分に両立する。しかしながら、二つの途のいづれがヨリよきかを評価し判定する価値判断の規準については、かの命題は、なにも語らない。最善のものが一つしかないといふことは、《最善のものは、二つはありえない》といふ真理の単純な帰結にすぎないからである。音韻論的解釈についてであらうが、なんについてであらうが、最善のものが二つあったら、それこそ、をかしい。すなはち、そのいづれかは、すくなくとも、最善のものにはなりえない。その意味では、解釈の多途に對して、最善の解釈は一つしかないといつてみたところで、それは、作業仮説としては、意義がない。むしろ、それは、疑ふべからざる自明の理として公理のごときものである。また、見方をかへていへば、科学の世界をはるか高く超越した神のことばにひとしい。しかも、反面、現実においては、「最善の音韻論的解釈は一つしかない」といふ命題は、わるくすると、個人の小さい主観を肯定することになる。ひとは——たれもがつねにとはいはぬが——一往、ある瞬間には、自分の解釈を——それ以上の解釈が考へられないといふ意味で——最善と信ぜざるをえないであらうから。そして、かゝる主観を克服すべき客観的規準は、——いま、うへに述べたやうに——、かの命題には内在しないのである。このやうにみてくるならば、どのみち、かの命題は、方法論的なのぞましさを一向にそなへてゐないといふべきである。といふことは、それは、——くりかへしていふが——、すくなくとも、音韻論の作業仮説としては無意義であるといふことである。

最後に、わたしは、この本稿の性格をはつきりさせておきたい。すなはち、これは、評論として筆を執つたものである。いひかへれば——このたびは——はつきりと意識して、服部教授の所論を評論するつもりで書いた。その方がいゝと思つたからである。そして、その旨をここに書くのは、それを明示しておいた方がいゝと思ふからである。しかし、厳密には、學術的論文とはいひがたいものである。それは、わたしにとつて、とりあげた問題の性質によるものと考へる。わたしには、批判の形である命題を克服して独自の作業仮説をまで展開する興味にとほしい。それは、あまりに、一般論にすぎることである。ちなみに、評論といふことばを用ゐたのは、文芸評論が文芸作品ではないといふ意味あひで、学問上

の論文に批評を述べてもそれそのものは學術論文にかならずしもならないとおもつたからである。しかし、文芸評論がさうであるやうに、學問評論もそれ自体価値はあるとおもふ。しかしながら《音韻論》に関する「最善の解釈」への見通しを方法論的反省からいかなる作業仮説として打ちだすべきかそ服部教授の関心事であり、そのかぎりでは、これの設立を積極的に問題としてとりあげないかぎり、わたしの述べるところは、結局、評論ではあつても、さして學問上に寄与する批判となつてはゐないかもしれない。しかし、わたしとしては、——もし、許されるなら——むしろ、一往、それで満足なのである。たゞし、わたしも、ある信条を、なかなか守られないけれども、懐いてだけはゐる。すなはち、解釈の多途を肯定するかぎりは、解釈に対して、技術の価値の相対性をいっそうよく示しうるであらうとおもはれることばをえらんで、優劣のこゝとをとりあげた方が適當であるとかんがへてゐる。そして、およそ、《(最も)すぐれた解釈》といふことのうちには、《(最も)美しい解釈》といふ意味をこめてかんがへてゐる。われわれの問題にしてゐるのは、意識としての解釈でもなければ、行為としての解釈そのものでもなく、技術の適用の過程としての解釈を通じて表現として展開され定着された解釈である。表現について《美》が問題になるのは、あやしむに足りない。ことごとしくクローチェの名をもちだすほどのことはないが、かれの《美学》が、——それは、芸術および言語の哲学であるよりは、まづ文化哲学であるが——、そこに《表現の学》としてのおよび一般言語学といふ限定の施されてゐることをおもひおこす人もあるであらうとおもふ。われわれは、學問的創造の精神にかり立てられて、そこに《生》を、つまり、學問をわが職分して生きるいきがひを、みいだしてゐるものと信ずる。要は、學問においては、芸術におけるがごとく、感覺論的意味において《美》が究極の自己目的にならないだけである。ちなみに、こゝに《感覺論》とは、その語源の意味における《美学》のこと。しかしながら、服部教授の「最善の解釈」も、それがどのやうな内容をもたうとも、とにかく最善と評価されるものであるとき、それは、きつと、あらゆる解釈のうちで、また、最も美しい解釈の私たちを示すにちがひない。そのやうな解釈の美が、およそ、いかなる美的範疇のものであるかといへば、それは、厳格と清潔とのそれであらう。かゝる美がいかにして顕現するかといへば、それは、できるだけ明快な形における緻密な飛躍のない構成とできるだけ単純な形において必要なことだけを余さぬ周到とを最も純粹に追求する記述において最もすぐれた形で顕現するものと信ぜられる。たゞし、くりかへしいふ、これは、音韻論の作業仮説ではない、それは、恩師橋本進吉の學問からまなびとつた、としこる渝らぬ、わたしの根本の信条——あへて、かくのごときを吐露することが許されるならば——なのである。